

第4章

ジョン・ガランにおける「個人支配」の研究序説

栗本 英世

要約：

アフリカの個人支配を考察するうえで、国家元首だけでなく、反政府武装組織の指導者も重要な位置を占めていると考えられる。こうした組織は、国家の陰画であったり、相似的なコピーであったりするので、個人支配の研究にあらたな視点をもたらすことが予想される。本報告は、22年間にわたって歴代のスーダン政府との内戦を戦い抜いた SPLM/SPLA（スーダン人民解放運動／スーダン人民解放軍）の創設以来の最高指導者、ジョン・ガランに焦点をあてた事例研究である。2005年1月の包括的平和協定の調印後、ガランは7月にはスーダン共和国の第一副大統領に就任したが、同月末、キャリアと人気の絶頂時に、事故死した。本論文では、彼のライフヒストリーや死の前後の状況を概観しつつ、来年度の調査研究に向けた問題点の整理をおこなう。

キーワード：

ジョン・ガラン（John Garang）、SPLM/SPLA、スーダン、ゲリラ

はじめに

脱植民地期のアフリカ諸国は、多数の反政府武装組織、あるいはゲリラ組織を生み出した。ゲリラ組織のリーダーも、大統領や首相と同様、政治・軍事的

なりリーダーである。もちろん、国際的に主権を認められた国家の元首と、たんなるゲリラのリーダーを同列に論じることはできないという意見はあるだろう。しかし、たとえば冷戦期には、親米あるいは親ソ政権と戦っていた反政府組織は、政権が属するのとは逆の陣営からは外交上国家並みの待遇を受けていた。また、「何々民族解放戦線」といった立派な看板は掲げているが、大衆的基盤は脆弱で、実態のほとんどない組織も多いが、他方では、ある一定の領域を長期にわたって実効支配している組織もある。1980年代後半から90年代前半にかけては、ウガンダ、エチオピア、エリトリア、ルワンダで、こうした「しっかりした」ゲリラ組織が政権の奪取に成功し、現在まで政権を維持している。とくにウガンダのムセヴェニ（Yoweri Museveni）、エチオピアのメレス・ゼナウィ（Meles Zenawi）、エリトリアのイサイアス・アフエワルキ（Issaias Afewerki）という三人の元ゲリラである支配者は、しばらくのあいだ、アフリカの「ニュー・リーダー」としてもはやされた。

反政府武装組織の支配のあり方は、理念的には敵である国家のそれとはさまざまな意味で対極に位置していても、その国の政治文化を共有しているために、現実には相似形であることもあるだろう。反政府武装組織のリーダーたちが、元々は政権側の政治家や高級官僚、あるいは高級軍人であった場合もあるから、これは当然のことかもしれない。

いずれにせよ、反政府武装組織における支配のあり方を考察することは、「アフリカの個人支配再考」をテーマとする本研究会にとっても意義があると思われる。戦争状態にある政治・軍事組織を統率するには、強力なリーダーシップが必要であり、個人支配は不可避であることは容易に想像がつくが、現段階ではあきらかではなく、今後の研究が待たれる課題は多い。アフリカにおける反政府武装組織の包括的な研究は、クリストファー・クラップハムが編集して数年前に刊行された『アフリカのゲリラ』（Clapham [1998]）を例外として、いまだ数少ない。ここでは、アフリカの個人支配というテーマを念頭におきながら、今後の課題として、三つの問題系を設定しておこう。

1) ゲリラのリーダーという個人にかかわる問題系。

ライフヒストリーなどの検討を通じて、リーダーという個人がいかに関成されたかを、政治文化と関連づけながら分析する。組織内外の人は、彼のパーソナリティについてどういうイメージをもっているのか。もし、カリスマ的な資質があるとしたら、その源泉は何か。

2) 組織の支配にかかわる問題系。

意思決定のシステムが存在するか否か。存在するとしたら、個人支配といかに並存しているのか。どのような重要な役職があり、その任命は、いかなる基準にもとづいて行われるのか。重要役職保持者とリーダーとの個人的関係。軍事部門と政治部門は区別されているか。それぞれの部門における上意下達と下からの情報や意見をくみとるシステムはいかなるものか。

3) 人びとの支配にかかわる問題系。

実効的支配をおこなっている領域があるか。あるとしたら、支配のシステムと内実はいかなるものか。

反政府武装組織に関するこうした諸問題の解明は、それ自体として重要な研究上の課題であるばかりでなく、アフリカの国家における個人支配の問題を考察するうえでも、新たな視点をもたらすものと考えられる。

以上の問題設定にもとづき、本章では、スーダン人民解放運動/スーダン人民解放軍(SPLM/SPLA)の創設以来の最高指導者であり、22年間にわたる内戦を戦い抜き、スーダン政府との平和協定にもとづいてスーダン共和国の第一副大統領に就任した直後の2005年7月、ヘリコプター事故の結果死亡したジョン・ガラン(John Garang)を考察の対象にとりあげる。

第1節 ジョン・ガランについて 個人的記憶と研究対象としての諸問題

スーダン人民解放運動/スーダン人民解放軍(SPLM/SPLA)¹の創設(1983年5月)以来の最高指導者(議長兼最高司令官)であり、22年間にわたって歴代のスーダン政府との内戦を戦いぬき、2005年1月9日の包括的平和協定

(Comprehensive Peace Agreements: CPA) の調印をうけて、同年 7 月 9 日にはスーダン共和国の第一副大統領に就任したジョン・ガランは、同年 7 月 29 日、そのキャリアと国民的な人気、および世界的な名声の絶頂期に、不可解なヘリコプター事故によって死亡した。

ジョン・ガラン (John Garang de Mabior) スーダン人の多くは、敬愛の念をこめて「ドクトル・ジョン」と呼ぶ。また、SPLM/SPLA のメンバーからは「チェアマン」あるいは「C in C」(Commander-in-Chief) と呼ばれている。私は、私にとって過去 20 年間、スーダン人の友人・知人やスーダン関係の研究者との話題の焦点であった。ガランを直接・間接に知っている人たちとの会話のなかで、彼は、卓越したタフな軍人・戦略家、弁舌の才にたけた演説者、老練で将来のヴィジョンを有する政治家である一方、冷酷な独裁者、自らの保身に専心する日和見主義者、自らと家族の蓄財と物質的安楽さに執着する腐敗した男としても語られていた。また、南部の分離独立ではなく、スーダン全体の解放と「新スーダン」の建設をめざす、彼の一貫した闘争目標は、南部人の多数にとっては受け入れがたいものであったが、これがたんなる「建前」なのか、「本音」なのかについても意見がわかれていた。

ケニアのナイロビ、エチオピアのガンベラやアジスアババでは、私の滞在と同時期にガランも滞在中のことがしばしばあった。そうした状況下で、すぐ近くにガランがいると意識しながら彼について語ることは、格別の思いがあった。

私自身、単独の会見ではなく、グループによる表敬訪問²ではあったが、一度だけガランと会って言葉を交わしたことがある。場所は、スーダン政府との和平交渉が行われていたケニアのナイバシャのホテルで、2004 年 1 月のことだった。1 月 7 日に、石油収入を北部と南部に平等に配分する「富の分有」合意書が調印された直後で、また政治色のない表敬団だったこともあり、約一時間にわたった面会は、とてもリラックスした友好的な雰囲気の中で行われた。私は、ガランの人間的な魅力と、人心を掌握する巧みさに強い印象を受けた。これまでに会った、アフリカの政治家のなかでも、もっとも「カリスマ」を感

じた人物であるといつてよい。

政治・軍事組織の長であったジョン・ガランのリーダーシップには、個人支配の色彩が濃厚であったことは事実である。1983年から1991年にかけて、組織の最高機関は、約10数名の司令官（commander）から構成される政治軍事最高司令部（Politico-Military High Command: PMHC）であったが、じつは一度も召集・開催されたことはない。1991年は、SPLM/SPLAが最大の危機を迎えた年である。5月にはエチオピアの社会主義政権が崩壊し、同国から受けていた支援のすべてと、同国内に存在した基地や訓練所のすべてを失った。混乱のなかで、8月には、3名の司令官が独裁的体制を理由としてガランに反旗を翻し、組織は分裂するに至った。PMHCの会議がはじめて開催されたのはこうした状況下であり、反乱には加わらなかった司令官たちの結束を再確認し、組織の指導部を再構築するためであった。1994年以降は、民主的な意思決定のシステムが形式上は整備されたが、依然として権力は、ガランという個人に集中しているという状態が継続した。「SPLM/SPLAのすべては、ガランの頭の中と彼が持ち歩くブリーフケースのなかにある」「彼が外遊で不在のときは、組織は麻痺している」といった表現は、平和交渉が本格化した2002年以降もよく耳にしたものである（資料3参照）。

さて、これまでスーダン関係の友人や知人としてきたように、ジョン・ガランについて語ることはできる。しかし、彼について、とくに「個人支配」をテーマとして「学術論文」を書くとなると、話しは別である。そもそも、ガランという個人の人生と彼をめぐる現象の何について、どういう枠組みで書けばよいのか。いずれにせよ、私がこれまで書いてきた人類学的・民族誌的な論文とは、かなり異なる枠組みとアプローチが要求される。

また、資料的な制約の問題もある。スーダン内戦については、数多の著書、論文、報告書が刊行されており、サイバースペース上の情報も大量にある。しかし、SPLM/SPLAを組織論的に論じたものは数少ない。ダグラス・ジョンソンらによる研究が例外である（Johnson [1998] Johnson and Prunier [1993]）。また、ジョンソンの近著『スーダンの内戦』[2003]は現在のところ、もっとも包

括的かつ詳細な、質の高い内戦の研究であり、本研究にとっても重要な文献である。SPLM/SPLA の幹部であり、1991 年には反主流派の旗揚げに参加したピーター・アドゥオク・ニアバとラム・アコル³の著書は、内部者の視点で組織と内戦を分析したものとして貴重である（Nyaba [1997], Akol [2001]）。いずれもガランに批判的な立場から書かれており、個人支配の実態を示すエピソードを多数含んでいる。ガラン自身の演説集は、単行本として刊行されている（Garang [1992]）。また、SPLM/SPLA の刊行物やホームページにも、彼の演説や談話が掲載されている。これらは重要な資料であり、体系的な収集と分析が必要であるが、いずれも「公式」の文書であり、ガランの人となりやライフストーリーに関する情報はほとんどない。欧米やアフリカの新聞・雑誌に掲載されたインタビューなども含めて、必要と思われる資料の収集と分析は今後の課題である。

ガランの遺族や彼を直接知る者へのインタビュー調査は、資料収集のもうひとつの方法である。この可能性については検討中であるが、平成 18 年度にどの程度実施できるか、現段階では不明である。

本章は、来年度の調査研究のための予備的なレポートである。CPA の調印から死の前後までの数ヶ月のあいだに、ガランが国民的英雄として祀り上げられていく過程をたどり、そのあとで、現在知りえている範囲内で、彼の人生をたどってみたい。

第 2 節 国民的英雄の誕生と突然の死

SPLM/SPLA の創設以来の議長兼最高司令官であるジョン・ガランは、1980 から 90 年代にかけては、独裁者とみなされ、運動の路線をめぐる対立者の拘禁や処刑、SPLA 将兵による人権侵害や掠奪、虐殺の責任者として反主流派や欧米の人権団体の批判を浴びてきた。また、多量の南部スーダン人にとって、南部スーダンの分離独立ではなく、スーダン全体の解放と「新スーダン」の建設

を唱える彼の路線は、非現実的であり、南部スーダン人の願望を代表していないとみなされてきた。しかし、2005年1月の包括的和平協定（CPA）調印の前後から、南部だけでなく、スーダン全体のナショナルな指導者として影響力を増大した。アフリカ諸国の元首やパウエル国務長官、それに多数のスーダン人が参加し、ケニアの首都ナイロビで執行された CPA 調印式で、ガランがおこなった長時間の演説は、彼の人生にとっても、SPLM/SPLA の歴史にとっても、記念すべき瞬間であった（資料1）。

ガランのキャリアは、7月9日、ハルツームにおける第一副大統領就任でピークに達した。22年ぶりに「敵地」ハルツームに乗りこんだガランは、「600万人」の国民の熱狂的歓迎を受けた。特筆すべきは、国民的な歓迎 南部人、北部人、西部人、東部人の関係なく、キリスト教徒もムスリムも を受けたことである。就任式における演説（資料2）も、CPA 調印式におけると同様、いやそれ以上に、感動的で格調高く、正義と平等、民主主義、多文化主義を基調とする「新スーダン」への夢を人びとに与えるものであった。

この瞬間には、スーダンでは過去半世紀にわたって失敗が繰り返され、21世紀のポストモダンの現在では、すでに過去の夢であると多数が考えている、理想の国民国家の建設という事業が、スーダンにおいて実現されつつあるかのように思われた。ガランは、南部の英雄から国民的英雄に格上げされ、多いの南部人も南部の分離独立ではなく、統一スーダンの枠内での変革に期待を寄せるようになった。2003年から激化し、国際的な課題となっているダルフル紛争も、SPLM が加わった新しい「国民統一政府」のもとで、すみやかに解決されるという期待がふくらんだ。CPA にもとづき、3年後に自由で公正な総選挙が実施されたなら、SPLM が第一党の地位を獲得し、ガランがスーダン全体の大統領に就任するだろうという予想も、現実味をもって語られていたのである。

しかし、このユーフォリアの時期は、わずか3週間しか続かなかった。

7月29日、ガランはウガンダを訪問し、長年の盟友であるムセヴェニ大統領と会談した。これは、第一副大統領として初の外遊であった。ムセヴェニ大統領専用のヘリコプターで、エンテベ空港をへて、南部スーダンのルンベックに

向かった。しかし、ウガンダ・ケニア・スーダン国境付近で消息が途絶え、8月1日、死亡確認のニュースが世界中を駆けめぐった。

墜落の原因は、悪天候（雷雨）と燃料切れであると報道されている。ガランと5名のボディガード、ヘリコプターの乗員と添乗者7名、合計13名の全員が死亡した。この事故をめぐるのは当初から「陰謀説」が流布している。SPLMの代表も加わったスーダン政府の事故調査委員会の報告書はいまだに発表されていない。ここでは、この問題には深入りせず、死後のSPLMとメディア、およびスーダン人の対応を概観する。

ガランの遺体は最初、事故現場に近いニューサイトに安置された。ニューサイトは、ケニアとウガンダとの国境付近の、隔離した人口希薄地域に位置しており、ガランの公邸のひとつがある。隔離はしているが、ケニア北部にある、南部スーダンに対する人道的援助の基地であり、国連機関や国際NGOの事務所があるロキチョキオからは、セスナ機で20分足らずで到着する。SPLM/SPLA指導部の対応はすばやく、ニューサイトで開催した会議において、ガランに次ぐナンバーツーの地位（SPLM副議長兼SPLA参謀長）にあったサルヴァ・キール・マヤルディット（Salva Kiir Mayardit）を後継者に指名した。キールを筆頭とするSPLM指導部とガランの未亡人レベッカ・ガランは、ナイロビから空路到着した外交団の弔問を受けた。

ガランの死は、多いのスーダン人に衝撃を与えた。首都のハルツームでは、死亡のニュースが報道された8月1日に南部人による暴動が発生し、商店や自動車が破壊された。2日には北部人による南部人に対する報復が開始され、3日まで続いた。政府の発表によれば、死者は70名にのぼる。独立後のスーダンは、ほぼ40年にわたる2度の内戦を経験しているが、首都で南部人と北部人がこれほどの規模で殺しあったのは、前例がない。暴動は南部の首都ジュバでも発生し、中心部の商店街（店主はほとんど北部人）は、ほぼ完全に破壊され、掠奪と焼打ちにあった。この結果、ジュバで商売を営んでいた北部商人数百名はジュバから、ハルツームに去った。これらの暴動の結果、CPAの調印とガランの第一副大統領就任によってふくらんでいた、北部人と南部人が平等な

国民として共存する「新スーダン」の夢は、あっけなくしぼんじってしまった。

さて、ハルツームとジュバで暴動が発生していたさなかでも、ガランの死に対する SPLM の対応は迅速であった。遺体は青ナイル州（北部スーダン）のクルムック、南部スーダンのルンベック（SPLM の「首都」）、ボル（ガランの故郷）、イエイを巡回し、それぞれの場所で人びとの弔問を受けた。最終的な葬儀は、8月6日、ジュバの英国国教会で執行された。葬儀には、南アフリカ共和国ムベキ大統領、スーダンのバシール大統領、周辺諸国の国家元首をはじめとするVIPが参列した。葬儀は、テレビで実況中継された。この日の朝、私はナイロビに到着し、ピーター・アドゥオクの自宅でテレビ中継をみた。ジュバは、南部スーダンの首都とはいっても、開発・発展からとりのこされており、国外からの賓客が宿泊できるホテルも、食事がとれるレストランもない。葬儀の会場になった教会とその周辺地域には、トイレさえないのである。「ジュバでの葬儀は、アフリカの指導者たちに南部スーダンが置かれている状況を知らしめるいい機会になった。恥をかかされたバシール大統領は自業自得だ」というのが、テレビをみていた南部人たちの感想であった。ガランの遺体は、町はずれの丘の上に建設された、モニュメント的な墓に埋葬された。

ガランの葬儀は、2005年8月の時点では、いまだ樹立されていなかった、SPLMを主体とする新しい南部スーダン政府にとって、最初の国家的な事業であったと考えられる。ジュバの前に、北部スーダンのクルムックを含む4カ所を遺体が巡回したことの政治的な意義はおおきい。これは、そもそも誰のアイデアなのか。また、CPAが調印されたといっても、ジュバは依然として政府軍の支配下にあった。SPLAの部隊と幹部たちは、ガランの葬儀を機会に、はじめてジュバに乗りこんだのである。いずれにせよ、交通・通信状況の劣悪さを考えると、ガランの死亡が発表された8月1日から、6日の葬儀までのわずかな、かつ混乱をきわめた期間に、これだけのことを計画し実行したSPLMの組織力はたいしたものである。

さて、私は8月6日から1週間ナイロビに滞在し、その後19年ぶりにジュバを訪問したのち再びナイロビに戻った。その間、ケニアの新聞⁴やテレビで、

ガランの死について、あるいはガランという人間について、いかに報道されたかを観察する機会を得た。ひとことでいえば、ケニアのメディアは、「祀り上げ」といってもよいほどの賞賛の記事を報道していた。ガランに与えられた修辞は、「アフリカの偉大な政治家」、「ヴィジョンをもった男」、あるいは「モーゼ」などである。このうち、ガランを預言者的な地位にまで押し上げる「モーゼ」という概念は注目に値する。この言葉がいつから使われ始めたのか、正確なところはわからないが、8月6日の葬儀において、未亡人のレベッカは夫をモーゼに喩えるスピーチをおこなっていた。

また、ナイロビの目抜き通り、ウフルハイウェイには、商品や会社の広告のかわりに、“A Man of Vision” “We Remember John Garang” などのキャプションが付いた、巨大なガランの顔写真のパネルが掲げられ、夜間はライトアップされていた。この写真パネルの掲揚は、8月末まで続けられた。

さて、ケニアのメディアにおける報道は、ガランの賞賛一色であったわけではない。直接的な批判はなかったが、注意深く記事を読めば、ガランの隠れた側面が浮かび上がってくる。それは、後継者となった、それまではメディアへの露出度が低かったサルヴァ・キール(Salva Kiir)の紹介記事においてである。新聞では、キールは、清潔で腐敗とは無縁な、「聞く耳をもつ」男として紹介されていた。たとえば、他の SPLM 内部でのランクがキールよりも低い司令官たちが、ナイロビに豪邸をもち、子弟をインターナショナルスクールや、さらには欧米の学校に通わせているのに対して、キールは中産階級が居住するごく質素なアパートに住み、子弟は公立の学校に通っていることを伝える記事もあった。こうした「腐敗」の頂点に立っていたのがガランであり、彼の一家が、普通の南部スーダン人の想像をこえる、豪勢な生活を営んでいたことは、周知の事実である。新聞記事は、暗黙のうちに、ガランとキールを対比し、後者を賞賛しているのである。

さらに8月8日の *The EastAfrican* 紙に掲載された記事は、直接的にガランのリーダーシップのあり方、つまり個人支配を批判し、キールを持ち上げるものであった。この記事は、2004年11月末から12月はじめにかけて、南部スーダ

ンのルンベックで開催された SPLM 指導部の会議の議事録の一部であり、いわば内部資料の暴露記事である（資料 3）。

2004 年 11 月、ガランとサルヴァ・キールのあいだで緊張関係がたかまり、一時は反乱や分裂に発展するといううわさが流れ、インターネット上でも情報がとびかっていた。この危機は、ルンベック会議で一応の収束をみた。

新聞に掲載された議事録が信頼できるものとすれば、これはきわめて注目すべき重要な文書である。キールは、きわめてオープン、率直にガランを批判しており、その要点はガランの個人支配と腐敗にある。また、出席したほとんどすべての司令官たちが、ガランにきわめて近いとみなされている者も含めて、異口同音にキールの立場を支持したことも驚きである。*The EastAfrican* は、東アフリカ 3 国で販売されている、定評のある高級紙である。実はこの議事録は、すでにインターネット上では流布していたのだが、この時期にこの新聞が議事録を公表したことの意図はどこにあるのだろうか。他紙のガランとキールに関する報道の内容も含めて、今後検討されるべき課題である。

第 3 節 ライフヒストリー

先に述べたように、ジョン・ガランのライフヒストリーについては情報が十分ではない。以下は、ディアスポラ・スーダン人が運営する平和構築のためのウェブサイト（www.gurtong.org）に掲載されている情報である。

1945 年 6 月 23 日 ジョングレイ地方の Ajakgiet 地域 Wagkulei 村で誕生。父 Mabior Atem Aroy、母 Gag Maluwal Kwal。

1952 年 トンジ小学校入学。

1956 年 ワウのプセリ中学校入学。

1960 年 ルンベック高校入学（中退）

1962 年 ウガンダをへてタンザニアへ。海外留学試験合格。

1968年 アイオワのグリーンネル大学(Grinnell College)で経済学の学位取得。
「本の虫」として知られていた。カリフォルニア大学バークレー校大学院で学ぶ奨学金を得るが、タンザニアに戻り、ダルエスサラーム大学で東アフリカ農業経済学を学ぶ。ムセヴェニと会い、親交を結ぶ。

1968～69年 アニヤニヤ I に参加。ゲリラ兵士になる。

1972年 アジスアババ平和協定後、スーダン政府軍に統合（大尉）。

1973年 タンザニアをへてアメリカにもどる。アイオワ州立大学で農業経済学の修士号取得。

1976年 ジュバでレベッカ・ニャンデンと結婚。

1978年 妻とアメリカへ。アイオワ州立大学で研究を続ける。

1980年 博士号（経済学）取得。帰国、ハルツーム大学農学部講師、陸軍大佐に昇進。

1983年 5月16日、SPLM/SPLA 創設。

2005年 1月9日、CPA 調印。7月9日、スーダン共和国第一副大統領就任。

2005年 7月30日死去。子どもは2男4女。

ウェブサイトに掲載されたこの経歴が事実だとすると、まず注目されるのは、1950年代の当時としては、きわめてスムーズに学校教育を受けていることである。数百キロ以上離れた中学校と高校はもちろんのこと、小学校も生まれた村からはかなりの距離にある。おそらく、両親か近い親族に、教育の重要性を認識していた人物がいたのだろう。

1960年ころから第一次スーダン内戦が激化する。まだ10代の少年だったガランは、故郷をあとにして東アフリカを目指した。この時期からアメリカに留学するまでの事情は、まだあきらかにはなっていないが、2005年8月5日の *The Daily Nation* 紙に興味深い記事が掲載されている。

ガクー・マテンガ(Gakuu Mathenge)記者が書いた “Kenya became second home since he first arrived as a teenager” という記事である。記事の内容は、記者自身が2004年12月にナイヴァシャでおこなったガランとのインタビューにもとづい

ている。以下はその要約である。

ガラン少年はアニャニャに参加。しかし、ブッシュで戦うより、学校教育を受けたほうがよいとの助言を受ける。5人の少年とともに陸路、エチオピア・ケニア国境のモヤレヘ（1963年なかごろ）。植民地政府の官憲に逮捕される。ナイロビへ護送。拘置所で、のちにケニヤッタの政府で副大臣となるアーサー・オチュワダと知り合う。オチュワダは釈放後、内務大臣だったオギンガ・オディンガと接触。オギンガの命令で6名の少年たちは釈放された。それだけでなく、オボテにウガンダ北部の難民キャンプに滞在できるよう依頼してくれた。教会 NGO の助けによって、タンザニアで高校修了。

タンザニアの高校教師たちは、ガランの学力の高さに驚く。Ordinary と Advanced の2レベルの検定試験を同時に受験。Aレベルを修了したのち、ナイロビのキベラ地区にしばらく居住。1965～66年には、ニエリ県マティラ地域のガトゥンアンガ高校で、数学教師兼校長として勤務した。

スーダンを出出してケニアにたどり着いた年代に関して、さきほどの年表とのあいだに1年のずれがあるが、この記事は逮捕と拘留、オギンガ・オディンガとの接点、タンザニアの高校に進学できた経緯、高校卒業後、アメリカに留学するまでのあいだ、ケニアで高校教師をしていたことなど、短い記事のなかにも、少なくとも私にとってははじめて耳にする興味深いエピソードが散りばめられている。

ところで、上記の年表には重要な事実が欠落している。1978年にアメリカに渡ったのは、アイオワ大学の博士課程で学ぶことが当初の目的ではなく、スーダン陸軍から派遣されて、アメリカ陸軍の士官学校で研修するためであった。一説には、アメリカで対ゲリラ戦（counter-insurgency）の専門家としての訓練を受けたと言われている。また、1983年、SPLM/SPLA が創設された当時の彼の役職は、陸軍の参謀学校（Staff College）校長であった。

アメリカで学士号を取得したのは弱冠 23 歳のときであり、当時のスーダンはまだ第一次内戦のさなかであった。アメリカでの修士号と博士号の取得、アメリカ陸軍の教育機関における専門的な訓練も含めて、同年代の南部スーダン人と比べれば、ジョン・ガランはきわめて高度なキャリアの持ち主であるといえるだろう。また、アメリカで培った、軍部や民間との人脈が、SPLM/SPLA の発展にいかに作用したのかも、今後解明されるべき課題である。

さて、1983 年以後のジョン・ガランについては、なぜ彼が SPLM/SPLA の最高指導者に就任できたのか、初期の社会主義的な言説は本音か建前か、権力闘争の過程で、個人支配のシステムがいかに確立されたのか、といったさまざまな課題がある。SPLM/SPLA の組織的特性の解明によって、個人支配のあり方を考察することになるだろう。

注

¹ 設立当初は、SPLA/SPLM であったが、現在は SPLM/SPLA と呼ばれている。名称変更の時期と理由は要検討。

² 2003 年 12 月に、ケニア北西部で、ケニアとウガンダの牧畜民およびスーダン難民の若者が参加して開催された「平和マラソン」の主催者である、南部スーダン人の NGO 活動家（私の知人）と女性マラソン・ランナー、テグラ・ロローペ（数年前まで世界記録保持者）の一行。平和マラソンの報告と、将来南部スーダンで平和マラソンを開催を認めてくれるよう依頼した。

³ 包括的平和協定の実施によって、ハルツームに「国民統一政府」が成立し、ラム・アコルは外務大臣、ピーター・アドゥオクは上院議員に任命された。

⁴ 日刊の *The Daily Nation* と *The Standard*、および週刊の *The EastAfrican* 紙。

参考文献

- 1) Published books and articles

- Akol, Lam [2001] *SPLM/SPLA: Inside an African Revolution*. Khartoum: Khartoum University Press.
- Clapham, Christopher ed. [1998] *African Guerrillas*. London: James Currey.
- Garang, John [1992] *The Call for Democracy in Sudan*. Edited and introduced by Mansour Khalid. London: Kegan Paul International. (Enlarged and revised edition of *John Garang Speaks*, 1987.)
- Johnson, D.H. [2003] *The Root Causes of Sudan's Civil Wars*. Oxford: James Currey.
- Johnson, D.H. [1998] "The Sudan People's Liberation Army and the Problem of Factionalism," in Clapham ed., [1998]
- Johnson, D.H., and Gerard Prunier [1993] "The Foundation and Expansion of the Sudan People's Liberation Army," in M.W. Daly and A.A. Sikainga eds., *Civil War in the Sudan*. London: British Academic Press.
- Nyaba, Peter Adwok [1997] *The Politics of Liberation in South Sudan: An Insider's View*. Kampala: Fountain Publishers.

2) Newspapers

The Daily Nation (Kenya)

The Standard (Kenya)

The EastAfrican (Kenya)

3) SPLM/SPLA sources

Manifesto, Sudan People's Liberation Movement, 31 July 1983. Reprinted by Office of the Representative SPLM/SPLA Southern Africa.

New Sudan, pilot issue (October 1986) no.2 (June/July 1994).

SPLM/SPLA Update.

Southern Sudan Vision (published by the SPLM/SPLA Nasir faction) .

4) Websites

www.SPLMToday.com

www.sudantribute.com

www.gurtong.org

www.sudan.net

www.irinnews.org

www.bbc.co.uk

資料

【資料1】ジョン・ガランの演説、包括的平和協定調印式、ナイロビ、2005年1月9日 (<http://www.SPLMToday.com>)

この喜びの日に、スーダンのすべての人びと 最南端のニムレから最北端のハルファまで、西端のジェネイナから東端のハムシュコレイブとポート・スーダンまで

に挨拶を送りたい。私は、長いあいだ沈黙のなかで苦しんできた、スーダン中のすべての周辺化された田舎の人びとに挨拶を送りたい。私は、富の生産者でありながら、富をもたず、長年にわたって生活条件の悪化を経験してきた、農民、労働者、専門職の人びとに挨拶を送りたい。私は、あらゆる場所にいるすべてのスーダン人女性に挨拶を送りたい。スーダンの女性は、世界の他の女性と同様、周辺化された者のなかでももっとも周辺化された人たちであり、彼女らの苦難は言葉では表せない。

[中略]

この平和協定は、新スーダンの第二共和制を告げるものです。スーダンははじめて、人種、宗教、ジェンダーの違いにかかわらず、すべての市民が正義、名誉、尊厳にもとづいて自発的に結びついた国になるのです。

[中略]

私たちの見解では、スーダン人の多様性を排除して、一枚岩的なアラブ＝イスラーム国家を建設しようとするハルツームに本拠を置く歴代政権の試みこそが、スーダンの根本問題であり、スーダンの紛争を規定してきたのです。スーダン国家は、スーダンの人びとの大部分をガヴァナンスから排除し、政治・経済・社会の領域で周辺化してきました。このことが、排除された人たちを抵抗に駆り立ててきたのです。スーダンで、いくつかの戦争があり、これからも戦争が続くことの原因は、スーダン人の多数がガヴァナンスの参加者ではなかったことに尽きます。スーダンのアラブ＝イスラーム国家は、合意にもとづく社会的契約による、統治される側の合意によってではなく、力によって押しつけられたのです。そして、力には力をもって対応してきたのです。

スーダンの根本問題は、私たちが新スーダン、新しいスーダンの政治秩序と呼ぶところの、全員を包含するスーダン国家を樹立することによって解決されるでしょう。新スーダンでは、宗教、人種、部族、ジェンダーの違いにかかわらず、すべてのスーダン人が平等な参加者です。もし、これがうまくいかなければ、国の分裂といった他の解決法を求めることになるでしょう。しかし、私たちは、新スーダンは可能だと考えています。北部スーダンにも、私たち SPLM/SPLA とおなじ考えの人たちが多数おり、私たちと同様、人間性に関する普遍的理想 すべてのスーダン市民に自由、正義、そして機会の平等を保証する を信じているからです。南部の問題と同様、ダルフル、東部および他の地域の問題は、ナショナルなレベルで全員を包含するスーダン国家を樹立すること、そしてスーダンの各地方への権限委譲を完全に実現することが、解決のために必要であることをあきらかにしました。もしこれらが実現できなければ、この国の統一が維持されることはないでしょう。

しかし、私たちが新スーダンと呼ぶ、この全員を包含するスーダン国家には、私たちがひとつの国や国民とする、たとえば歴史のような、なんらかの基盤が必要です。こうした基盤はあるのでしょうか。私の答えはイエスです。そしてこの肯定的な回答が、過去 21 年間にわたって SPLM のヴィジョンを導き、かつ支え、そして CPA に到達することを可能にしたのです。

[以下、旧約聖書を引用し、「スーダン国民」の歴史的基盤を論じる]

創世記第 2 章 8 - 14 節：スーダンはエデンの園の一部であった。ピソン (Pishon) 川 = 白ナイル、ギホン (Gihon) 川 = 青ナイル。

「また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。その第一の名はピソンといい、金のあるハビラ (Havilah) の全地をめぐるもので、その地の金は良く、またそこはブドラクとしまめのうとを産出した。第二の川はギホンといい、クシの全地をめぐるもの。」(第三、第四の川は、ティグリスとユーフラテス)

歴代志下第 14 章 8 - 10 節：アサ王の治世、ゼラ (Zerah) という名のスーダン人の将軍が、100 万の軍勢を率いてユダに侵攻した。

「アサの軍隊はユダから出た者三十万人あって、盾とやりをとり、ベニヤミンから出た者二十八万人あって、小盾をとり、弓を引いた。これらはみな大勇士であった。

エチオピアびとゼラが、百万の軍隊と三百の戦車を率いて、マレシャまで攻めてきた。アサは出て、これを迎えマレシャのゼパタの谷に戦いの備えをした。」

列王紀下第 19 章 8 - 11 節：スーダン (翻訳聖書ではエチオピア) の王テルハカ (Tirhakah) が、エジプトの軍勢を率いていた。

イザヤ書第 18 章 1 - 2 節：うたががなく、現在のスーダンの記述。

「ああ、エチオピアの川々のかなたなる

ぶんぶんと羽音のする国、

この国は葦の船を水に浮かべ、

ナイル川によって使者をつかわす。

とく走る使者よ、行け。

川々の分れる国の、たけ高く、膚のなめらかな民、

遠近に恐れられる民、

力強く、戦いに勝つ民へ行け。」

民数記第 12 章 1 - 2 節：預言者モーセの妻はスーダン人 (クシの女) だった。

【資料 2】ジョン・ガランの演説、スーダン共和国第一副大統領就任式、ハルツーム、2005 年 7 月 9 日 (<http://www.SPLMToday.com>)

(前略) すべての学生と若者たちに挨拶を送ります。紛争後の時期に入った今、諸君たちには将来に向かって努力してほしい。なぜなら、国家の再建は、君たち若者の世代の責任であるからです。

(中略)

包括的平和協定 (CPA) と暫定国民憲法 (INC) によって、私たちはすべてのスーダン人民によるすべてのスーダン人民のための真の独立を実現する過程を開始することになります。CPA、INC、そして今日の就任式は、私が旧スーダンの第一共和制と呼ぶものの公的な終焉と、新スーダンの第二共和制の開始を告げるもので

す。これからは、歴史上はじめて、スーダンに、自決権と大衆の意思を諮る権利にもとづき、正義と人びとの自由意志によって自発的に統一された国になるのです。この国では、人種、宗教あるいはジェンダーの違いにかかわらず、すべての市民の人権、自由と尊厳が、完全に尊重されるでしょう。(中略)私は、すべてのスーダン人民と政治勢力に、CPA と INC に関するコンセンサスを形成し、良き統治と平等な開発の実現、腐敗の一掃、スーダンの再出発をはじめよう呼びかけます。これらが実現すれば、膨大な自然・人的資源を有するスーダンは、北東・東アフリカ、アフリカ全体、そして世界のモデルとなるでしょう。

(中略)

第三に、すべてのスーダン人に、あなたたちは自由だと告げたい。CPA と INC には、あなたたちの諸権利、人権、政治・社会・宗教・文化的権利のすべてを保障する条項があります。あなたたちは自由なのです。スーダン人よ、羽根をひろげて飛び立ちなさい。より一層の自由へ、すべてに人に自由と正義をもたらす新スーダンに向かって、飛び立ってください。(以下略)

【資料3】サルヴァ・キールの発言、2004年11月29日から12月1日、ルンベック

「もし、われわれがナショナルな指導者であるなら、しかし私はそうは思っていません。なぜなら、指導部の構造にまとまりがないからです。自分たち自身に正直になりましょう。この会議が終われば、われわれは外国訪問の旅に出るのでから。

運動の構造を導く、行動規範 (code of conduct) は存在しません。議長の外遊中、なんの指示ものこされず、議長代行も存在しません。誰が運動の責任者なのか、私にはわからない。それとも、議長は (責任を) ブリーフケースに入れて持ち運んでいるのでしょうか。

議長は、指導部評議会 (Leadership Council) を設立することによって、国民執行評議会 (National Executive Council) を殺してしまいました。しかし、国民会議 (National Convention) の条項には、指導部評議会のことは一行も書かれていません。彼は、政治軍事最高司令部を再興したいのでしょうか。(中略)

議長はすべてです。財務官から最下級の役職まで。構造の欠如のゆえ腐敗が生じ、除去するのが困難なほどに悪化した説明責任の欠如も生じています。

実際、われわれが対処すべき行政上の問題は多々あります。特定の個人が議長と直接接触することを許すことのために生じる、指揮系統の機能不全も、こうした問題のひとつです。(各州の) 知事が、直接議長に対して責任を負うとすれば、ダニエル・アウェット司令官の仕事はどうなるのでしょうか。

議長は、(各県の) 長官の任命をすべきではありません。

蔓延する腐敗についてひとこと申しあげたい。現在、われわれの運動のメンバーのなかには、私的な会社を設立し、屋敷を購入し、外国の銀行口座に莫大な預金をもつ者がいます。われわれ自身が、こういう具合に悪行にふけてきたことを考えると、これからいったいどんなシステムを南部スーダンに樹立しようとしているのか、疑問に思います。」